

〈総説〉

「近代歴史画の父」小堀鞆音研究の意義と課題

¹小堀馨子 ²中西正紀

¹帝京科学大学総合教育センター

²たちばな科学文化研究所

Issues on the study of Kobori Tomoto, the father of modern historical painting

¹Keiko G KOBORI ²Masanori NAKANISHI

¹Teikyo University of Science

²Tachibana Institute of Science and Culture

Abstract

The purpose of this study is to objectively evaluate the life and works of Tomoto Kobori, known as the "father of historical painting". Tomoto was born on 26th March 1864 in modern Sano City, Tochigi Prefecture. Since both his father and elder brother performed locally as painters, he excelled at drawing from an early age. Seeking the necessity in accurately depict historical scenes of the past, Tomoto eagerly studied Yusoku Kojitsu, a study of traditional codes in court and military. As a result, Tomoto made a name in his restoration of Japanese traditional armour as well as his paintings. Earning prizes in his twenties and thirties, he devoted himself to make medieval armour in his forties, due to the engagement in the restoration of the national treasure of that kind in 1902. Tomoto was reassigned as a professor at Tokyo Fine Arts School in 1908. He was invited as an Imperial household artist in June 1917. In his later years, he was also appointed as the director of Japanese Style paintings in Meiji Memorial Picture Gallery in 1926. Unfortunately, the hard work required in this project, Tomoto fails in health and caused, passing away on 1st October 1931. With the change in values after World War II, his achievements, which depict many battle scenes from the ancient times, were regarded as belligerent and completely forgotten by the public. However, related on his high skills as a painter, and the details based on the update historical evidence of his days, Tomoto's artistic quality has slowly been reevaluated since the 1970's. An objective and fair evaluation of his work shall allow us to analyse the impact of his work on the intellectual history of his time from a new perspective.

キーワード：小堀鞆音、日本画、歴史画、復古大和絵

Keywords：Kobori Tomoto, Japanese art, historical painting, Fukko yamato-e, restoration of Japanese painting

1. はじめに

「近代歴史画の父」と呼ばれる小堀鞆音（ともと）は、日本画を学ぶ者には周知の画家であるが、現在その業績と評価に関する研究は然程多くない。その一因には、後述するように研究資料が水害で流失してしまったという不運があるが、第二次世界大戦後の価値観の変化により歴史画の需要が低下し、鞆音の弟子の多くが心ならずも歴史画制作から離れてゆく例が重なった結果、歴史画というジャンルに対してなかなか正当な評価が下されない、という風潮もあったと考えられる。またカラー写真の普及などにより鞆音が重視した「精密な再現」に基づく史料記録の担い手が絵画から写真へと移行し、絵画においては朦朧体や印象派のように線描による写実性よりも自然光を画面に再現する芸術性に評価基準が置かれた事（田邊, 2020, p.97）^{*1.1)}も指摘できる。

しかし、戦後80年近くも経って、直系の弟子たちは全て物故し、関係者も多く鬼籍に入りつつある21世紀の現代においては、小堀鞆音研究を客観的な学術研究として進めることがむしろ可能になったと考え、日本画壇における歴史画の衰退とその原因を探求する手がかりとして、ここに現時点での研究状況と課題を記す。

2. 小堀鞆音の生涯

小堀鞆音研究は、現時点では2014年に刊行された小堀桂一郎『小堀鞆音—歴史画は故実に拠るべし』²⁾を除いては体系的な研究がない。没後翌年には美術雑誌『美之国』で特集号が生まれ、戦中期までは当時の日本画壇の主だった人々が折に触れて言及する対象であったが、戦後は30年以上研究が途絶え、1970年代後半からやっと散発的な研究が登

場する。本章では基本的に上掲書（小堀，2014）の記述に沿って、靱音の生涯をまとめる。

2-1. 幼年時代から少年時代

小堀靱音は文久4年2月19日（1864年3月26日）に下野国安蘇郡旗川村小中（現・栃木県佐野市）で、農業を営む須藤惣兵衛と妻美奈の三男として生まれた。本名は桂三郎である。父惣兵衛は晏齋（あんさい）と号し、近隣から節句幟の武者絵などを依頼された絵師でもあった（林,2023, p.8）³⁾。長兄の勝三は長じて桂雲と号し、南画系の山水画を描いたが靱音が7歳の時に早逝した。須藤家は農家であるが、周辺の大半の家々と同様に、藤原秀郷（那須の藤原氏＝須藤）の後裔であるという意識を強く保持していた。このことは後年靱音が落款で「藤原朝臣」と署名していたことからもうかがえる（小堀，2014, p.3）。

桂三郎は数え年6歳の頃に寺子屋に入塾するが、先生の似顔絵ばかり描いているので、先生が叱ろうとして九九を言わせるところ見事に暗誦し、描いた絵にも画才が見られたので先生が叱る気を喪失したとの逸話がある（同，pp.9-10）。数え年7歳頃には同郷小中村の先達である田中正造と縁故のある勤皇志士だった赤尾豊三から寺子屋で尊皇思想の薫陶を受けた形跡がある（同，pp.10-11）。明治6年（1873年）4月に寺子屋が閉鎖され田沼村に小学校ができると桂三郎は尋常科第3学年に編入され、2年後に卒業すると同校の代用教員として2年間勤めている。明治10年（1877年）に同職を辞して田沼少教院に入塾し、明治12年（1879年）の16歳まで亀田櫻園のもとで頼山陽『日本外史』の輪読という形で漢学を学ぶ（同，pp.11-14）。画業については特に師につかず、帰省する度に父や兄から学んでいた模様である。弟子の安田靱彦は「先生は全く独学の人といてもいい」と証言しているが（美術新論，1931, p.171）⁴⁾、父兄からの教授をどう見るかは解釈が分かれる。

赤尾豊三による薫陶と亀田櫻園による漢籍講義が後年の靱音の勤皇思想への道筋を開いたことは容易に推測できると小堀（2014）では述べられているが、明治開化期の熱烈な西欧文明受容が明治10年（1877年）の西南戦争で一段落し、日本の古き良き文物を改めて見つめ直すという風潮が強い明治10年代にあって、心意気のある人間が愛国的ナショナリズムを当然自明と受容するのは特異ではなく、むしろ時代の趨勢に乗ったとも考えられる。明治13

年（1880年）に亀田塾での修業を終えて実家に戻っていた桂三郎は明治14年（1881年）の第2回内国勸業博覧会（3月1日より開場）の直前に同年代の有志と語らって東京に出奔する（同，pp.22-25）。須藤家は三男の出奔を一向に気に掛けず、桂三郎は親戚の家に転がり込んで博覧会を含めた東京見学をしていた節がある。明治16年（1883年）、20歳の桂三郎は小堀菊次郎^{*2}の死後養子となり、姓を改めて小堀家の家督を相続する（同，p.27）。この時から二年ほど「小堀雨舟」の号で活動する。

2-2. 青年時代から壮年期前半

明治17年（1884年）第2回内国絵画共進会に雨舟は親子で出品し、父の晏齋は狩野派と分類されたが、雨舟の『南朝三傑』は「土佐派」と分類されている（同，pp.29-30）。同会では土佐派宗家の土佐光文から教えを受けた川崎千虎（ちとら）から大塔宮（護良親王）の鎧について「博物館で見た鎧をそのまま描いていて、着用当時の状況（有職故実（ゆうそくこじつ））を理解していない」という趣旨の批判を受ける（同，pp.30-31）。この批判を真摯に受け止めた雨舟（桂三郎）は千虎に入門し、土佐派の絵と有職故実を学びつつ、甲冑武具を構造的に理解することに努める。この態度は後年弟子たちに受け継がれ、弟子たちも正確な構造理解を目指して研鑽を積んだ。

しかし翌年の開校を控えた美術学校入学を志した明治21年（1888年）、父に代わり須藤家を掌っていた次兄良三郎より事業不振のため学資を送れないと告知された桂三郎は美校受験を諦める（同，p.40）。明治22年（1889年）には師である川崎千虎の本名靱太郎より一字を貰った靱音（ともと：「ともね」と記されることもあるが、「ともと」が正しいと三男の安雄が証言している。）に号を改め（同，p.42）、後の明治35年（1902年）頃に戸籍名自体を「桂三郎」から「靱音」へと変えている（座談会，1932, p.87）⁵⁾。

創作面では明治22年（1889年）創刊の小学校児童向け雑誌『小国民』で武者絵の挿絵なども担当して、生活の支えともした。またこれを機に児童向け雑誌の挿絵が従来の浮世絵から当時の風俗を厳密に研究した歴史画へと移行し、靱音はその元祖となったと弟子の尾竹国観から述べられ（座談会，1932, p.85）、その後の教育現場での活用の先駆けとなっている。

翌明治23年（1890年）、数え年で27歳の靱音は

下野国（栃木県）黒羽藩家老小山田家の娘、2歳年下の鈴子と結婚し、田中正造が媒酌人を務めた。なお、田中が足尾鉍毒事件に際し明治34年（1901年）に明治天皇への直訴を断行した後も親交があり、田中が大正2年（1913年）に亡くなった後には墓碑に刻む田中の全身画を描いた*³。

明治25年（1892年）、日本青年絵画協会に参加した鞆音は東京本郷の第一高等学校（旧制）へ大画面の額装図「菅公図」と「田村将軍図」を納入し、「文武両道図」として同校の倫理講堂に掲げられた。これは2年前の「教育勅語」発布に伴う受注とみられ（小堀，2014，pp.48-49）、同校校長木下広次の掲げた文武両道精神、および戦前の日本における倫理道徳教育の象徴として、後年の解説論文でも歴史的価値を与えられており、現代でも複数の研究者が研究対象としている^{6), 7), 8), 9), 10)}。明治27年（1894年）の日本美術協会展覧会では「法住寺殿焼討図」が銅牌を受けた。

明治30年（1897年）、東京美術学校助教授となった鞆音は後の代表作の「武士」や大作「常世」を完成し（同，pp.83-94）、同年の日本絵画協会共進会で前者は第2回の銅牌、後者は第3回の銀牌を受けた。両図に感銘した14歳の安田鞆彦が明治31年（1898年）1月に入門したが、同年3月に同校校長の岡倉天心が退職した「美術学校騒動」に際しては師の川崎千虎と共に同校を辞職し、岡倉が創立した日本美術院創立の正員となった（同，pp.109-121）。しかし鞆音は明治33年（1900年）に美術院同人が集住した「谷中八軒屋」から離れ（同，p.127）、翌年の日本美術院・日本絵画協会合同第10回共進会で「粧」が無賞に終わったことで、岡倉達とは明確に距離を取った（同，p.170）。

「武士」は弓を引く姿で描かれ、強弓で知られる源為朝の姿だと言われる。大きな眼を見開いた表現は岡倉の重なる指導を拒絶した結果であり、その指導を受容した「常世」に対して弟子の磯田長秋や棚田暁山（ぎょうざん）が鞆音の原案の方が優れていると評した点を含め、美校騒動後に鞆音が岡倉から訣別する遠因となっている（同，pp.83-92、牧野，2022，p.211）。

そして明治35年（1902年）、鞆音は日本画家の水野年方の賛同も得て「歴史風俗画会」を設立し、故実考証家の関保之助らとともに美術院の「新派」とは異なる画法を探求する（小堀，2014，pp.198-199）。同会自体は翌年の第3回展示会で終了するが、これを母体として弟子の安田鞆彦や磯田長秋、小山栄達

らが明治38年（1905年）に「紫紅会」、さらに2年後には松本楓湖門下の今村紫紅を加え「紅児会」と改名した新たな歴史画集団が生まれ、後に小林古徑や前田青邨らを加えた同会が岡倉天心没後の大正3年（1914年）に再興された日本美術院における歴史画分野の主流となる*⁴。

鞆音の最後の弟子である羽石光志にも学んだ歴史画家の折井宏光は、「武士」の描写や表現、考証の深さが直弟子の安田鞆彦、為朝の自称名「鎮西八郎」の題で「武士」を模写した松岡映丘、そして同作で鞆音が行った「故実をすべて知った上で」「画家としての感性によって、鎧の色を変更したデフォルメ」の手法を昭和4年（1929年）制作の「洞窟の頼朝」*⁵で再現した前田青邨などに決定的影響を与えたとしている（折井，2003，pp.18-19）¹¹⁾。美術史家の日並彩乃は小堀鞆音と松岡映丘の關係に注目し、『小国民』で鞆音の絵に親しんだ松岡が美術学校で鞆音に師事し、後に鞆音が松岡を同校の助教授に推薦した一連の経緯を解説している（日並，2016，pp.319-20）¹²⁾。一方、新派を志した安田鞆彦は保守的な画風を守る小堀鞆音と訣別したという指摘も日並によってなされている（日並，2016，p.321）。

一方で明治33年（1900年）、病没した次兄の遺児を養うため「国風百画会」という作品頒布会を佐野の唐澤山神社で開催し、百五十点ほどの絵画を一年余りの間に受注制作する（小堀，2014，pp.171-197）。この作品群には「明治三十三年國畫百作之一」（ママ）との印が押され、制作年代が明確に判明する貴重な基準資料となっている。この他、明治35年（1902年）に出版された『日本歴史掛図』では「当今歴史画家の泰斗」である「小堀鞆音画」の文言が表紙に記され、鞆音は上古から近代まで、前後集で計40点を描いた（牧野，2021，p.210）*^{6 10)}。

後の『鞆音遺響』に対する『美術研究』誌書評では明治30年前後の諸作品を「当時の評壇を刺激する所尠（すく）なからざりし作品」「翁往年の意気を偲ばしむる」と評価されている（木下，1932，p.22）¹³⁾。

2-3. 壮年期後半から晩年

自らの絵に格調と正確性とを与えるため、鞆音は有職故実の研究にも情熱を注いだ。甲冑研究は明治29年（1896年）、南北朝時代の赤糸緘腹巻の入手が契機とされ（小堀，2014，p.73；p.211）、明治35年（1902年）に巖島神社所蔵の「紺絲威鎧」「小桜威鎧」が国宝に指定された時には日本美術院に運ばれたこれらの美術品について川崎千虎の指導下で関保

之助と共に修理監督となり、翌年にはその修理復元を完成させた（同、2014, p.212-217）。同作業以後、鞆音は甲冑制作に没頭し、更に小桜威鎧の模作を3年がかりで制作している。鞆音は自作の復元甲冑などを積極的に着用して写真を撮り（考古界、1907, pp.338-339）¹⁴⁾（棚田、1930）¹⁵⁾、これは有職故実研究の実証として他の画家の制作方法にも影響を与えたが、明治40年（1907年）の『帝国文学』誌上において東京帝国大学国文学教室の藤岡作太郎（夏牛）教授から「甲冑制作に興じる余りに本業が疎かになっている」と批判を受けるほどとなる（同、2014, p.218）。関からも「小堀さんは、遠慮なくいうと故実に少し凝りすぎた形で（中略）桜井駅の楠公の図などを見ると、楠公の着そうのないものまで珍しがって着せているので、私は或時小堀さんに、楠公は古道具屋じゃありませんよと云ったことがあった」と述懐されている（関、1936, p.4）¹⁶⁾。

この時期の鞆音は画壇の重鎮となり、明治40年（1907年）開設の文展（文部省美術展覧会）では第1回より審査員、翌明治41年（1908年）には正木直彦校長の働きで東京美術学校に教授職で復帰した。大正6年（1917年）に帝室技芸員、大正8年（1919年）に帝国美術院会員に任じられる。これに伴い展覧会への発表が減少したことは、鞆音の急逝後に安田鞆彦が惜しんでいる⁴⁾。大正12年（1923年）の関東大震災では日暮里の自宅の被害は免れたが、鞆音は翌大正13年（1924年）に当時の駒澤村深澤（現在の世田谷区深沢）の新町分譲地内に宅地を購入し、明治27年（1894年）11月18日上棟の古民家を谷中より移築し転居する。

鞆音の晩年は聖徳記念絵画館と深く関わる。大正12年（1923年）8月に同館の壁画調製委員を委嘱されたが、翌月の震災による会合延期に続き大正14年（1925年）4月に制作方針の相違から横山大観、下村観山、川合玉堂の3人が同委員を辞職し、さらに鞆音が彼らの後任に推した吉川霊華が昭和4年（1929年）に早逝したため、鞆音はその後を埋める窮余の策として同館で唯一人3点の制作を担当する^{*7 17)}。鞆音への栄典と重責は続き、同年に国宝保存会委員、翌昭和5年（1930年）に勲三等瑞宝章を受章した。先立つ昭和3年（1928年）には鞆音が監修と作画を務め、尾竹国観も兄の尾竹竹坡とともに関わった副教材『尋常小学国史絵図 下巻（六年生用）』の初版が制作され^{*8}（中西、2023.6, p.8）¹⁸⁾、鞆音の歴史画が持つ教育効果が改めて活用された。

昭和6年（1931年）も聖徳記念絵画館のための絵画制作を続け、9月7日に第1作「廃藩置県」を自ら搬送したが、その直後に背中に腫瘍が発生した。筆者が入手した当時の書簡からは、鞆音はこの発症を深刻に考えていなかったとかがえるが^{*9}、病状は持病の糖尿病の影響で急速に悪化した。9月25日に広尾の赤十字病院に入院し、切開手術を行ったが経過は思わしくなく、10月1日に門弟らに囲まれて死去した。その際に安田鞆彦が謹写した「遺影」画が残されている（個人蔵）（栃木県立美術館、1982, p.159）¹⁹⁾。享年68（満67歳）、最後まで制作活動に関わったが、換言すると自らの手で業績の集大成を行う機会がなかったことになる。

3. 小堀鞆音没後の活動史

3-1. 活発な展示活動

前章のとおり、昭和6年（1931年）10月1日に鞆音が急逝すると、その当月に早速鞆音の遺作展が故郷の佐野にある春日岡山厄除大師で開催された（小堀、2014, p.331）。東京の谷中斎場で10月7日に行われた告別式（同、p.329）の朝には深沢の自宅へ宮中から野口明侍従が遣わされて幣帛とともに正四位を遺贈され（同、p.416; 百年史²⁰⁾、1997, p.498）、11月1日には帝国美術院創立二十五年の功労者として金盃一組が霊前に捧げられた。鞆音の臨終直後に病室へ駆け付けた東京美術学校校長の正木直彦は授与式翌日の「時事新報」紙に追悼文を寄せた（百年史、1997, p.504）。なお、この時に香典返しの意味を込め、長男で洋画家であった稜威雄（いづお）により私家版の画集『鞆音遺響』²¹⁾が刊行された（小堀、2014, p.416）。同書は明治の「法住寺殿焼討図」から絶筆の「身延山隠棲図」まで15点を収め、帝国美術院附属美術研究所の雑誌『美術研究』誌上の書評では「鞆音翁は土佐派技巧の正統的な傳承者として、又有職古実<ママ>に精通せる画人として、明治大正画壇を歩んだ本格的の大道は夙（つと）に世人の熟知せる所」とされた（木下、1932, p.22）¹³⁾。

翌昭和7年（1932年）、鞆音の芸術活動の集大成とも呼ぶべき展示会が、鞆音の弟子が明治45年（1912年）に作った「革丙会」（かくへいかい）（代表者：棚田暁山）により上野公園にある日本美術協会の列品館で開催された。この際に作られた画集『弦迺舎畫迹』（つるのやがせき）には正木が序文を寄せた（小堀、2014, pp.331-332）。同編には後の震災などで失われた作品も多く含まれ、現在でも鞆音の制作活動の全体像を知るのに不可欠な一級の資料

である²²⁾。

そして遺族の間では、この一周忌の展示会後に関西在住の美術記者へ評伝執筆のために各種資料を預けたが水害のために流失したという話が伝わっている。これは昭和9年(1934年)9月の室戸台風に伴う「関西大風水害」に符合する。遺品整理の際、「五十余年間に亘っての先生の仕事の凡ての下図、草稿が一枚も失われずに唐櫃の中に整然と揃っていた」ことを小山栄達(小野栄達)が記しているが(小山, 1936, p.22)²³⁾、この水害によりこの草稿の大半、および鞆音が記していた納入簿や日記などが失われ、各作品の制作年代や納入先の多くが現在でも特定できずにいる。

3-2. 明と安雄—父の継承者

安田鞆彦ら父の弟子達の力を借り、父に代わり「二条城太政官代行幸」(昭和8年)と「東京御着輦」(昭和9年)の献納を完遂したのは次男の明(雅号:阿岐良(あきら)、花艇(かてい))と三男の安雄だった。明治31年(1898年)生まれの明は病弱のせいで美術学校へは進まず、父鞆音の下で学びながら画風を忠実に継いだ。鞆音追悼号となった『美之国』昭和7年(1932年)12月号の座談会では明が遺族代表として参加し(座談会, 1932, p.84-108)¹⁰⁾、鞆音直系の後継者との地位が明確だったが、昭和14年(1939年)に42歳で早世した(小堀, 2014, p.330)。現存作品は極めて少ないが、後述する吉澤記念美術館の「ヒーローズ&ヒロインズ」展では花艇名義の「源義家知伏図」が公開された。

一方、明治35年(1902年)生まれの安雄は父が在籍する美校の日本画科を卒業後、昭和9年(1936年)の帝展に「頼朝初陣」を出品し、皇太子継宮明仁親王(現上皇)誕生奉祝事業として同年に有栖川宮記念公園の敷地を下賜された東京都が同地に建設を企画した「養正館」に飾る「国史絵画」のために「那須与一」を描いた¹¹⁾。

鞆音の十三回忌となる昭和18年(1943年)3月には安田鞆彦編『小堀鞆音歴史畫素描集』²⁴⁾が刊行され、同年10月には新文展で安雄の「神火」が特選となった。翌11月に革丙会が「小堀鞆音遺墨展」を遺作展と同じ上野公園の日本美術協会列品館で開催した(同, p.417)。既に戦時下での様々な統制が進み、革丙会の活動も昭和14年(1939年)に調布の深大寺境内に筆塚を建立したのを最後に低調となっていたが、武者絵を多く残し勤皇家でもあった鞆音は丁重に扱われ、大規模な展示会が可能であっ

た。この遺墨展にも関わった安雄は同年12月から翌昭和19年(1944年)1月に開かれた「第二回大東亜戦争美術展」において同年2月のガダルカナル島撤退作戦に題を採った「イサベル島沖海戦」を出展し、藤田嗣治や山口華楊、宮本三郎などの作品と一緒に公式絵葉書として採用された¹²⁾。

3-3. 戦後の「忘却」

昭和20年(1945年)8月の終戦後に日本を占領したGHQは軍国主義の一扫を図った。鞆音の死後も昭和17年(1942年)まで版を重ねていた『絵図』を含む国史は二学期の「墨塗り教科書」を経て同年末で教科そのものが廃止され、武者絵制作にも規制をかけた(折井, 2003, p.17)。そこで、祖父の川崎千虎の弟子だった鞆音について学んだ川崎小虎(しょうこ)は風景画に転じて叙情にあふれた作品を残した、その娘婿の東山魁夷は「道」の試作として極めて細密なデッサンを残し¹³⁾、心象風景を投影した代表作への基礎とした。頼朝と義経の兄弟対面を「黄瀬川陣」¹⁴⁾として描いていた安田鞆彦は「額田王」や「卑弥呼」のように武者が現れない歴史画を手掛け、昭和33年(1958年)には財団法人としての日本美術院初代理事長となった。彼らは鞆音作品の柱である「有職故実への忠実」や「緻密な観察を通じた本質への追求」などの精神は残しつつ、新たな時代へと対応した。

しかし、故人の鞆音にはその機会が与えられなかった。鞆音が描いた武者絵は古い日本の象徴と見なされ、鞆音の作品はまるで顧みられなくなった。『弦廼舎畫迹』序文で「先生の地位力量は蓋棺即定まる」と記し(小堀, 2014, p.332)、昭和15年(1940年)に死去した正木の言葉は二人の没後に起きた大日本帝国の没落という想像外の事態で大きく揺らいだ。鞆音は人脈と作風の双方で戦後の日本画壇に影響を遺しつつ、自らは専門家にしか記憶されない「忘却された大家」となった。小堀桂一郎の著作でも、執筆時の引用文献として提示される各種資料には「遺墨展」から後述する「遺作展」まで20年余りの空白がある(小堀, 2014, pp.371-381)。

三男の安雄も父と同様、価値観の転換に取り残された。「イサベル島沖海戦」をGHQに接収された安雄は戦後も世田谷の亡父の邸宅に住み、画家や文人が集った「雑魚クラブ」のメンバーとして交友関係を結んだが(安雄, 1968, pp.100-102)^{14) 25)}、平和文化国家の担い手として戦後活躍した多くの戦争画家と異なり、注目を浴びる場での作品発表が限定され

た^{*15}。アメリカに移された絵画が北の丸公園の国立近代美術館に永久貸与された昭和45年（1970年）に安雄は68歳で亡くなった。

3-4. 再評価の開始

昭和35年（1960年）、唐澤山神社の境内で同市ロータリークラブが一日展示会を開いた。一廻り前の「庚子」だった明治33年（1900年）の作品頒布会「国風百画会」会場で、故郷佐野の人々が靫音に再び光を当てた。東京では昭和4年（1929年）、美校教授の靫音を中心とし、氏家町（現在のさくら市）出身で仏画に長じ「紅児会」にも参加した日本画家の荒井寛方、日光二荒山神社の神官の子である洋画家の小杉未醒（後に放菴（迫内, 2022, p.102）²⁶⁾らが栃木県人の画家集団「華巖社」を結成し、同時期の栃木県内では下野新聞社主催「下野美術展覧会」も開催された。この風土は昭和45年（1970年）の同展再開や昭和47年（1972年）の栃木県立美術館^{*16}の建設に継承され、父の晏齋が描く節句幟を見て育った靫音（林, 2023, p.8）が郷土の美術界に大きく貢献したと敬意を払われていたことの反映とも考えられる^{*17}。

靫音の三十三回忌にあたる昭和38年（1963年）には東京都内で二十年ぶりとなる本格的な展示会「小堀靫音遺作展」が東京美術学校の後身となる東京藝術大学で開催された。昭和45年（1970年）には同じく藝大が正木直彦の名を冠した記念館で「小堀靫音展」を開催し、同大学所蔵の「武士」を含む多くの作品が展示された（小堀, 2014, p.417）。

昭和49年（1974年）には一高（旧制第一高等学校）の後身となる東京大学教養学部美術博物館が「旧一高収集歴史画展」を開催し、「文武両道図」の「菅公図」と「田村将軍図」も展示された²⁷⁾（小堀, 1975, pp.1-34）。両図は靫音没後、昭和10年（1935年）の一高駒場移転後も同校倫理講堂（現在の東大駒場キャンパス900番教室）に掲げられたが、戦後は非公開となっていた^{*18}。この展示会の時、同学部比較文学比較文化学科の助教授となっていたのが靫音の孫、稜威雄の長男である小堀桂一郎で、以後、本業の傍らで靫音の顕彰を進めることになった。

3-5. 靫音の子女達

靫音が東京美術学校助教授となった明治30年（1897年）に生まれた長男の稜威雄は父とは異なり洋画へ進み、美校洋画科で藤島武二に師事した後、大正9年（1920年）の卒業制作では物乞いの父子を

描いた「二人」が首席を得た（小堀, 2014, p.330）が、卒業後は公の美術展への出展を避け、在野の画家として過ごした。戦時中に疎開した静岡県沼津市に戦後も暮らし、中学校の教員をしながら同市の美術団体「静流会」で若い画家を指導する美術教育者として歩んだ稜威雄は、弟安雄の死去から5年後の昭和50年（1975年）に世田谷区深沢の靫音旧宅へ長男の桂一郎や孫娘の馨子（けいこ）を連れて転居し、昭和63年（1988年）に93歳で大往生を遂げた^{*19}。

末弟の四男、神風（みかぜ）は父の意向で東京美術学校を卒業した後、画家ではなく編集者となった。復員後も『婦女界』や『婦人公論』などの女性雑誌で活躍し、書籍の装丁なども手がけたが、昭和41年（1966年）に56歳で死去した。その娘、小堀令子は武蔵野美術大学を卒業後、靫音の妻で令子にとっては祖母となる鈴子の縁者、現代画家の小山田二郎に師事した後に小山田の内妻となり、小山田の没後は自らも現代抽象画の発表を始めた。靫音の孫で画家となったのは令子のみである。

この他、靫音と妻の鈴子の間には六人の女兒が生まれ、うち五人が育ったが、五女の綾子が昭和5年（1930年）に27歳で亡くなると、娘の供養のため観音経などを書写し、観音図などの仏画を制作した。この頃から靫音の作品には仏教的な画題が増え、日蓮を描いた「身延山隠棲図」が絶筆となった。同作品は『靫音遺響』に収録された。この際に造園した墓所へ翌年に「観音経を……」という今際の言葉を残した（小堀, 2014, p.328）靫音自身も入り、師弟関係となった川崎家の墓地と隣接して現在も多磨霊園内にある。長女の百合は旧唐津藩主の一族だった洋画家の小笠原丁、次女の浩子は靫音の弟子で聖徳絵画記念館に「琉球藩設置」を納め、戦後に琉球美術の第一人者となった山田真山に嫁いだ。浩子の孫の高江洲啓子は祖父の故郷の那覇市壺屋にある窯元「育陶園」の女将として活動を続けている。

その中、靫音病没の2年後、昭和8年（1933年）に稜威雄の長男として生まれた小堀桂一郎は疎開先で進学した沼津東高校（旧制沼津中学）から東京大学文学部独文学科へ進み、昭和44年（1969年）に同大教養学部の助教授になった。桂一郎はゲーテやホフマンスタールなどのドイツ文学から森鷗外へと研究対象を広げた比較文学者で、日本画の専門教育は受けなかったが、幼少時から祖父の作品に接していた。上記のとおり、桂一郎は東大の「旧一高収集歴史画展」に関わり、昭和50年（1975年）には世田谷の靫音旧宅へ父や娘とともに転居した。

3-6. 美術史と思想史からの諸展示

昭和57年（1982年）、宇都宮市の栃木県立美術館で没後50年を記念する「近代歴史画の父—小堀鞆音展」が開催され、2年後の昭和59年（1984年）に鞆音の故郷である佐野市郷土博物館で開催された「近代日本歴史画の巨匠—小堀鞆音展」とあわせ、美術史やその背景にある精神・思想史の潮流で鞆音が重要な起点になるという事実が認識された^{*20}。

美術史に重点が置かれた両展のうち、特に前者では『近代歴史画の父』という鞆音への評価が得られたことが貴重な視点である。同展の目録では小堀桂一郎が原稿用紙130枚、A4版で22ページの評伝を書いた。これは「革丙会」代表の棚田暁山が昭和15年頃にまとめた約80枚の草稿が基で、鞆音について公刊された事実上最初の伝記になった（栃木県立美術館, 1982, pp.9-30）。

一方、平成元年（1989年）からの『日本美術院百年史』刊行は全15巻、18冊の大部を10年間かけて完遂し、特に平成4年（1992年）発行の第3巻（上・下）は「紅兎会」の出展目録を含め、鞆音の紀伝に必要な制作活動や画壇人としての動静の資料を網羅していた²⁸⁾。

平成8年（1996年）には小堀桂一郎が題字を書いた顕彰碑が佐野市小中町の生家跡に設置され、同地の石碑では同市教育長（当時）の池澤嘉夫が起筆した。不如意の兄良三郎に代って青年期の鞆音を経済的に支え（小堀, 2014, p.40）、最後は鞆音の葬儀委員長の一人まで務めた池澤定吉の甥が嘉夫である。日本画家で東京藝大前学長（当時）の平山郁夫は、師匠の前田青邨が師事を果たせずに直弟子の安田鞆彦を羨み、自らにとっても少年期に「武士」を模写した^{*21}。藝大（美校）の大先達である小堀鞆音の碑の建立に相当の寄付を行った。これは社会での認知に比して画壇での鞆音が依然として重視されていることの一例でもある。

一方、思想史的な観点を際立たせたのは、平成18年（2006年）に明治神宮の主催により同神宮の文化館で開催された「小堀鞆音と近代日本画の系譜—勤皇の画家と『歴史画』の継承者たち」である。聖徳絵画記念館を含む明治神宮外苑創建八十年記念の特別展として開催されたこの展示会では、勤皇家としても知られた鞆音^{*22}がその作品に込めた精神性が改めて取り上げられ、桂一郎のもう一方の研究分野である保守思想との共通点が浮き彫りになった²⁹⁾。

3-7. 近年の活動

平成23年（2011年）、佐野市郷土博物館と佐野市立吉澤記念美術館の共同開催で「小堀鞆音没後80年展」が開催された。同展では鞆音を「郷土出身の歴史画の第一人者」という観点で扱い、同展の記念図録には小堀桂一郎が『小堀鞆音と歴史画の問題』（旧字体は新字体に変換）、美術評論家で文星芸術大学学長（当時）の上野憲示が『小堀鞆音の人と芸術』、吉澤記念美術館学芸員の末武さとみが『小堀鞆音の復古大和絵敬慕と近代歴史画創出について』の各論考を寄せた（末武, 2011）³⁰⁾。

平成26年（2014年）には桂一郎によって『小堀鞆音—歴史画は故実に拠るべし』がミネルヴァ書房から刊行され²⁾、鞆音の生涯の叙述に加えて末章で「精神史としての歴史画」が記されて、明治神宮での展示会で強調された鞆音の精神性が改めて取り上げられた。

また桂一郎が平成6年（1994年）に退官した後も東大教養学部では一高所蔵絵画の修復事業が続けられ、平成29年（2017年）の駒場祭（同学部の学園祭）では同学部図書館に鞆音作品が6点伝わっていることが画像と共に紹介され、京都工芸繊維大学講師（現在は准教授）で美術史家の井戸美里は翌平成30年（2018年）に同所での講演を含む内容を学術論文として公刊した^{6), 7), 8), 9)}。

令和元年（2019年）12月には鞆音作品の保全を主要目的の一つとした「一般財団法人桂石文化振興財団」が東京で設立された^{*23}。同財団の代表理事には鞆音の曾孫である古代ローマ宗教史研究者の小堀馨子、事務局長には東大文学部西洋史学科で馨子の同窓である中西正紀が就任した。他に鞆音作品の収集家として令和4年（2022年）の栃木県立美術館「小堀鞆音コレクション展」の元となる約40点の鞆音作品寄贈を行った日本美術研究家の林直輝、鞆音の鑑制作に関する研究の第一人者である甲冑師として同年の横浜市歴史博物館「追憶のサムライ—中世武士のイメージとリアル—」展^{*24}（横浜市歴史博物館, 2022）^{31) 32)}を構成した豊田勝彦らが理事として参加している。同財団は設立時に鞆音の愛好団体「鞆の会」を設立し、季刊発行の『鞆の會々報』（原文ママ）では馨子の父でもある小堀桂一郎による鞆音作品解題を毎号掲載し、一部は公式サイト上で公開することで^{*23}、鞆音研究の新たな拠点となっている。令和5年（2023年）からは「歴史画研究会」を開催し、鞆音作品の展示や専門家の解説などを通じて歴史画全体の再興に向けた活動も行っている。

また同財団は世田谷区深沢の靉音旧宅の保全活動も行っている。同邸は明治期の木造古民家という建築史、かつ関東大震災後に進んだ東京市街地の郊外発展当時の建造物という地域史上の稀少例でもあり、靉音遺品整理の際に掲載された集合写真の撮影場所である邸宅の縁側も当時の形で現存している(棚田, 1933, p.86)^{*25} ³³⁾。同邸に残る靉音作品、および靉音研究を含む小堀桂一郎の学術研究活動を支える文学・思想分野の書庫などと一体となった複合文化財としての保存が構想されている。

令和5年(2023年)には佐野市立吉澤記念美術館で収蔵企画展「ヒーローズ&ヒロインズ」が開催され、靉音作品が10点出品された^{*26}。現代人がテレビドラマや映画で歴史物語に登場する人物をイメージするのと同じ役割を近代において果たしたのが歴史画である、という認識のもとに「歴史や物語を臨場感ゆたかに・正確に描いた歴史画の第一人者」と靉音を評価した同展示会では、告知ポスターで靉音作「神功皇后と武内宿禰」を起用した。同展に際し、同館学芸員の末武さとみは『靉の會々報』で靉音作品の解説記事を寄せた(末武, 2023, pp.9-10)³⁴⁾

4. 小堀靉音研究の問題点

小堀靉音研究の障害は、先述のように水害で基本的な資料が流失してしまった点が多い。画家が作品をいつどこで誰の依頼によってどの位の時間を掛けて完成し、どんな価格で納めたか、という状況が判る書類が関西の伝記作家に貸し出されたまま、昭和9年(1934年)の阪神大水害で水没してしまったからである。また同年には家蔵遺愛品の入札が行われ³⁵⁾、靉音が蒐集した武具や絵画が散逸してしまったという不運な状況も研究資料が少ない一因となっている。

無論、他の画家のように、昭和20年(1945年)8月の敗戦に到る戦争の最後の1年半に日本の各地に起きた、空襲での被災や戦火により焼失ないし行方不明になった作品も多い^{*27}。戦後の混乱の中で困窮した所有者が譲渡売却して行方不明になった作品もある^{*28} ^{*29}。また第3章で述べたように、歴史画特有の事情として、靉音が多く描いた「武者絵」は戦前および戦中の教育において軍国主義と関連付けられたことで、戦後平和の名のもとに画題ゆえに忌避され、死蔵ないし破却された可能性もある^{*30}。

さらに展覧会への出品作品は半数以上が個人蔵である。小堀家が所有する作品も少なくはないが、地

元の栃木県での所有者が多く^{*31}、なかなか調査を行い難いという問題点がある。美術作品の調査とは、ガラスケースの中の掛軸を眺め、落款の真偽を確認することだけではない。箱書きが誰の筆になるものであり、どのようにして現在まで伝来したのか、という聞き取り調査を行うことも重要である。個人蔵の作品に関しては、昨今の個人情報保護の観点も相俟って、このハードルがかなり高くなる。

次に、靉音には贋作が多い点が挙げられる。皇室技芸員として靉音の名声は高かったため、生前から多くの贋作が存在した。現代でもインターネットオークションや骨董品として出てくる靉音作品の大半が贋作であると言っても過言ではない。贋作にも何タイプがあり、全くの赤の他人の作品に靉音の名を付けたものから、弟子などの関係者の作品に靉音の落款が記されてしまったと推測できるようなものまで存在する。巧妙に似せて作った偽印も複数点存在が確認されている^{*32}。このような贋作の存在が、研究の進展を阻んでいることは否定できない。

真筆鑑定が出ても、制作年代や画題が特定し難い作品は数多い^{*33}。靉音の日記なども全て流失しているため、いつどの作品が制作されたのか、という年代特定が難しい。落款の書き方からある程度の年代特定が可能な作品も存在するが、多数派とは言えない。制作年代が不明であると、時代による作風変化の傾向を分析しづらい状況になる。

5. 今後の課題

以上のように、小堀靉音研究においては多くの課題が存在する。その中には資料の流失など取り戻し難いもの、真贋判定や年代特定といった緻密過ぎて任の重い作業もあるが、そのようなマイナス面ばかりではない。近年、前述の桂石文化振興財団が靉音作品を新たに発見し入手する、あるいは所在を突き止めるという状況が生じている^{*29}。財団が入手した作品の中には、今まで題名のみが伝わっていた「経正詣仁和寺宮」や「元就巖島詣」があり、いずれも『靉の會々報』で解説されている³²⁾ ³⁶⁾。これらは明治33年(1900年)の「国画百作」の一つであり、基準資料として学術的価値が高い作品である。

また同財団の入手作品には美術作品研究にとって貴重な下絵三十数点が含まれている^{*34}。大正天皇即位大典の際に献納された後、下賜先の華族会館で空襲に遭って焼失した宮中能楽堂の鏡板の「老松」、岡倉天心との訣別を明確にした因縁があり、現在は所在不明となった「粧」、「武」の方は存在が確認さ

れていた「文武春秋図」の「文」などもあり^{*35}、今後の研究の進展を期待できる希望の光も見えてきている。下絵と本図を比較すると、画家がどの点を強調しており、どの点に修正を加えていたか、構図の違いから画家の思想の変化などが明らかになるといいう知見が得られる。この視点から『鞆の會々報』において林直輝が鞆音作「七福神図」を基として、朱筆の後に墨線による決定稿を描いて対象物を捉えていく通常の絵画制作とは逆の制作手法を解説している（林, 2023, pp.6-8）。

基礎資料の充実が進めば、作品研究の道も自ずと開けてくる。同財団の有する小堀鞆音コレクションの分析による今後の研究が待たれている。

謝辞

本総説論文の執筆にあたり、一般財団法人桂石文化振興財団理事の豊田勝彦氏と林直輝氏には多くの教示を受け、また小堀鞆音嫡孫で比較文学者の小堀桂一郎氏には多岐にわたる助言を受けた。この他にも小堀令子氏や小堀紀雄氏（安雄の長男）、そして多くの鞆音作品収蔵施設にはインタビューに応じていただいた。一般財団法人桂石文化振興財団からは会報を含めた資料の提供を受けた。美術史全般に関してJSPS科研費JP23H00001から助成を受けた。ここに深く感謝申し上げる。なお、1、2、4、5章は小堀が、3章は中西が執筆を担当した。3章は中西が『鞆の會々報』第3号・第4号に上梓した原稿^{37) 38)}を踏まえつつも、大幅に加筆改稿した。

【注】

- * 1 ただし後述するが、鞆音にとって弟子の川崎小虎の娘婿となった東山魁夷は代表作の一つである「道」の制作において、下絵の段階では非常に細密な線描デッサンを残している。
- * 2 小堀（2014）には死後養子に入った先の人名が記されていないが、名古屋大学の人事興信録データベースの小堀鞆音（第8版 [昭和3（1928）年7月] の情報）に記載がある。
<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-8791>（2024年5月5日閲覧）
- * 3 田中正造の墓碑に彫られた小堀鞆音の画とそのネガポジ反転再現図は下記のサイト参照
<https://www7a.biglobe.ne.jp/~cbx/enjoy140328.html>（2024年5月5日閲覧）。佐野市立吉澤記念美術館 田中正造翁没後百年顕彰事業 特別企画展「田中正造をめぐる美術」平成

25年（2013）

<https://www.city.sano.lg.jp/material/files/group/97/tanaka-list.pdf>（2024年5月5日閲覧）

- * 4 この部分は日本美術院の公式サイトに草薙奈津子が寄稿したコラムによる。公益財団法人日本美術院公式サイト、特別寄稿、草薙奈津子「再興日本美術院の作家たち」、
https://nihonbijutsuin.or.jp/column_detail.php?id=43（2024年8月16日閲覧）
- * 5 青邨作「洞窟の頼朝」は平成22年（2010年）、歴史画として初めて国の重要文化財に指定された。その翌年には鞆彦作「黄瀬川陣」が同じく国の重要文化財に指定されている。
- * 6 各図のうち、最後の40枚目のみは同時代と呼べる8年前、明治27年（1894年）9月に起きた日清戦争最大の海戦から題を取った「黄海之戦伊東祐亨」を描いた（伊藤は同海戦の帝国海軍連合艦隊司令長官）。今回のノートにおける調査の中で、鞆音が絵画として近代戦の「戦争画」を描いたことが確認できるのはこの一点のみである。
- * 7 同館展示の80点のうち、複数の作品を制作した画家は、鞆音と結城素明（2点）のみ。また、鞆音の弟子の川崎小虎や山田真山、磯田長秋や小山栄達も執筆した。
- * 8 同書は学習社により刊行されたもので、国定教科書ではないことに留意。島根県公式サイト、Web竹島問題研究所ページより、
<https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web-takeshima/takeshima08/iken-B.html>（2024年8月14日閲覧）
- * 9 鞆音自身が病没10日前の9月21日に腫瘍の苦痛が大きいゆえに会合を欠席する旨を記した結城素明ら宛の書簡参照（桂石文化振興財団提供）。このことは、東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 昭和6年10月の記事からも裏付けられる。
https://gacma.geidai.ac.jp/archives/100yh_fas03_175.pdf（2024年5月5日閲覧）
- * 10 同号では総計40ページに及ぶ鞆音関連記事の他、口絵で8作品11幅の鞆音作品を掲載した。
- * 11 養正館は昭和12年（1937年）に完成したが、戦後のGHQ接収を経て昭和29年（1954年）に閉鎖された後、「国史絵画」は昭和30年（1955年）に伊勢神宮徴古館へ移管された。旧養正館は昭和41年（1966年）に取り壊され、敷地跡に

- は昭和48年（1973年）に東京都中央図書館が建設されている。
- *12 小堀安雄：イザベル島沖海戦，東京国立近代美術館，昭和45年アメリカ合衆国より無期限貸与，1943。
<https://search.artmuseums.go.jp/records.php?sakuhin=11328>（2024年5月5日閲覧）
 - *13 昭和25年（1950年）制作の本図に先立つこのデッサンは、魁夷が妻（小虎の娘）と暮らした市川市に作られた「市川市東山魁夷記念館」に現存する。
 - *14 「雑魚クラブ」は昭和31年（1956年）に設立され、戦前の人気マンガ「ノンキナトウサン」作者の麻生豊を初代会長、旧制中学時代は画家志望だった作家の井伏鱒二を副会長としていた。
 - *15 戦後の安雄で注目される仕事は、東京新聞（中日新聞）夕刊の連載小説、富田常雄『武蔵坊弁慶』の挿絵制作である（昭和26年8月から昭和30年4月まで全1323回）。連載の後半期には同紙で前述の麻生豊が連載マンガを寄稿していた。
 - *16 県立美術館としては全国6例目。同館では本文中の記述通り、昭和57年（1982年）の本格的な展覧会や、令和4年（2022年）の林直輝による寄贈コレクションを元にした展覧会が開催された。
 - *17 一連の関係については、令和4年（2022年）に小杉放菴記念日光美術館が開催した『華嚴社一下野の画人たち』展、および同館学芸員の迫内祐司による同展図録²⁶⁾内の論考が詳しい。
 - *18 「一高同窓会ホームページ」には、大正中期の本郷倫理講堂の写真、及び駒場移転後の倫理講堂の写真に両図が鮮明に写りこんでいるのが確認できる。
<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/ICHIKOH/home.html>（2024年5月6日閲覧）
 - *19 稜威雄は戸籍上では明治30年（1897年）生まれであるが、これは関東大震災の際に戸籍が焼失し、新たに届け出た際に鞆音が間違っただけで、家族の間では「本当は未年（ひつじどし）生まれ」と伝えられており、それに従って明治28年（1895年）となる。なお、平成26年（2014年）の小堀桂一郎の著作に付記された年表では戸籍年を採用しているが、その場合は次女の浩子の戸籍上の生年と稜威雄の本当の生年が重複する（小堀，2014，pp.397-399）ことになる。小堀家が大らかで細かいことを気にしない気風だったことを物語るエピソードである。
 - *20 井戸（2018）⁷⁾の研究においても、鞆音作の「菅公図」と「田村將軍図」は一高講堂への掲額を通じて同校の文武両道に基づく倫理教育の一端を担ったと指摘されている（井戸，2018，pp.15-16）。
 - *21 同模写は現在、山梨県北杜市の「平山郁夫シルクロード美術館」に収蔵されている。通常は非公開で、筆者（小堀および中西）は令和5年（2023年）に同館にて写真資料を確認している。
 - *22 明治39年（1906年）共進会で銀牌受賞および宮内省御買上となった「楠公父子櫻井駅訣別図」など、「忠臣の第一人者」楠木正成は鞆音が好んだ画題の一つだった。令和4年（2022年）に京都国立博物館で開催された特別展『河内長野の霊地 観心寺と金剛寺—真言密教と南朝の遺産—』では、楠木氏の菩提寺である観心寺に収蔵されていた鞆音作の双幅「楠木正成・正行像」が展示された。一方、佐野（小中村）の西隣にある足利出身の足利尊氏は戦前の教育の中で「逆臣」とされ、鞆音自身も「国風百画会」の題材を含め、尊氏を描いた像は確認されていない。ただし、『日本歴史掛図』では後集第2図の「楠木正成之像」に続き第3図で「足利時代之風俗」、第4図で「金閣寺 足利義満」を描いている（牧野，2021，p.210）。
 - *23 一般財団法人桂石文化振興財団公式サイト：
<https://keiseki.org/>（2024年8月16日閲覧）
桂石文化振興財団『鞆の會々報』アーカイブ
<https://keiseki.org/archive>（2024年5月5日閲覧）
 - *24 同展では鞆音作品として桂石文化振興財団所蔵「経正詣仁和寺宮」、および個人蔵「勇将義経」が展示された。同展を特集した『書物学』³¹⁾では「勇将義経」に関する解説記事が掲載された（吉井，2022，pp.79-80）³⁹⁾。同展公式ページ：
https://www.rekihaku.city.yokohama.jp/tsuiku_no_samurai/index.html（2024年8月16日閲覧）
 - *25 写真に収まったのは、鞆音の遺族では年齢順に妻鈴子、次男明とその妻、三男安雄、四男神風、六女千枝子。弟子では入門順に棚田暁山、飯島眞風、羽石光志。鈴子は昭和20年（1945年）1月に交通事故で死去した（行年80）。
 - *26 他に第2章のとおり、小堀花艇（明）の「源

義家知伏図」も公開された。

佐野市立吉澤記念美術館：収蔵企画展「ヒーローズ&ヒロインズ」(2023年7月15日～9月24日)
https://www.city.sano.lg.jp/sp/yoshizawakinembijutsukan/2/1_4/23688.html (2024年5月5日閲覧)

- *27 鞆音の次女の浩子が山田真山との間に産んだ2人の息子は沖繩戦で落命している。
- *28 一例として、「遺作展」で展示された「和気清麿詣宇佐」図は『美之国』で「高松宮家ご所蔵」として図版が掲載されたが、現在は行方不明となった。一方、同家にあった舞楽図の衝立一对、「迦陵頻」と「胡蝶」は上野の森美術館の保管品として保存され、平成25年(2013年)に同館で開催された「有栖川宮・高松宮ゆかりの名品展」で展示された。
- *29 ただ、その後、その後に所在が再び判明した例も稀に存在する。「維盛哀別」は明治30年(1897年)の第7回日本美術協会絵画共進会で宮内省お買上となり、二度と人目に触れなくなったが、その後九條公爵家に下賜され、昭和8年(1933年)の『弦廼舎畫迹』²²⁾では当時には珍しくカラー版で収録された(小堀, 2014, pp.98-100)。昭和18年の『遺墨展』出展を最後に戦後は所在不明になっていたが、令和5年(2023年)になって「賜品」の由来も付いた外箱と揃いで大分県の二階堂美術館の所蔵品にあることが判明し、同年『鞆の會々報』第9号で中西による紹介記事(中西, 2023, p.6-8)⁴⁰⁾、翌年の第14号では小堀桂一郎による解題が掲載された(小堀, 2024, pp.1-4)⁴¹⁾。
- *30 その一例を折井宏光が記している。昭和13年(1938年)生まれの折井は国民学校(小学校)1年生の昭和20年秋に「墨塗り教科書」を経験した後、高校在学時(昭和29年～32年)には校内図書室に置かれていた『日本画大成』⁴²⁾で目次に記された鞆音作「武士」の図版や解説⁴³⁾が切り取られていた事を見ている(折井, 2003, p.17)。同書には鞆音作品が13点掲載されていた。
- *31 一例として、鞆音の故郷、佐野市小中町(旧小中村)にある人丸神社では大正12年(1923年)に制作された「柿本人麿神影」の所蔵が確認され、栃木県の有形文化財に指定されている。
とちぎの文化財【絹本著色 柿本人麿神影】：

<https://bunkazai.pref.tochigi.lg.jp/cultural/%E3%80%90%E7%B5%B9%E6%9C%AC%E8%91%97%E8%89%B2%E3%80%80%E6%9F%BF%E6%9C%AC%E4%BA%BA%E9%BA%BF%E7%A5%9E%E5%BD%B1%E3%80%91/> (2024年8月16日閲覧)

- *32 小堀(2014, pp.101-103)は、『維盛哀別』に関して贋作が存在しうる可能性を指摘している。
- *33 画題特定が困難な例として、『鞆の會々報』第10号における那珂川町馬頭広重美術館所蔵「古代武将図」(中西, 2023-6, p.7)、および同第13号における財団所蔵図の小堀馨子の論考がある(小堀馨子, 2024, pp.8-11)⁴⁴⁾。
- *34 鞆音の場合、上記の水害を逃れたという点で下絵の希少性はさらに増す。令和5年(2023年)10月に開催された第1回「歴史画研究会」では林直輝により下絵の解説を含んだ講演が行われ、その主な内容は林自身により『鞆の會々報』第12号で執筆された(林, 2023, pp.6-8)。
- *35 「文武春秋図」(明治40年(1907年))の「武」の下図は現在東京藝術大学美術館に収蔵されている。
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/165024> (2024年8月17日閲覧)

引用文献

- 1) 田邊咲智：菱田春草の欧米遊学と朦朧体，東アジア文化交渉研究，13, 81-102, 2020.
- 2) 小堀桂一郎：歴史画は故実に拠るべし-小堀鞆音，ミネルヴァ書房，京都，2014。以後、「小堀」とだけ記した場合には、小堀桂一郎を指す。
- 3) 林直輝：小堀鞆音「七福神図」について，鞆の會々報，12, 6-8, 桂石文化振興財団，八王子，2023-12.
- 4) 安田鞆彦：小堀鞆音翁を憶ふ，美術新論，6-11, 170-171, 美術新論社，東京，1931.
- 5) 小堀明，川崎小虎，尾竹国観，川船水棹，磐田豊麿，小山栄達，宮本勢助，太田天洋，棚田暁山，石川宰三郎：故小堀鞆音先生追悼座談会，美之国，8-12, 84-108, 美之国社，東京，1932.
- 6) 井戸美里：一高絵画資料の概要，東京大学駒場祭2017年度公開講座「東京大学駒場博物館所蔵の一高絵画資料の概要：一高伝来の「歴史画」について」配付資料，東京，2017.
- 7) 井戸美里：歴史画における有職故実と図案教育

- 高伝来の「歴史画」をめぐる—— 茨城大学五浦美術文化研究所紀要, 25, 15-40, 2018.
- 8) 井戸美里: 一高絵画コレクションの概要——高の教育理念と「歴史画」をめぐる, *BI*, 7, 19-34, 2014.
- 9) Ido, M.: Visualizing National History in Meiji Japan: The Komaba Museum collection, University of Tokyo, *The Japanese Society for aesthetics*, 20, 15-25, 2016.
- 10) 牧野由理: 明治・大正期に発行された玉川大学教育博物館所蔵歴史掛図に関する検討, *美術教育学* (美術科教育学会誌), 43, 207-218, 0032022, 美術科教育学会学会誌編集委員会編, 2022.
- 11) 折井宏光: 歴史画を描く (12) 小堀鞆音「武士」, *甲冑武具研究*, 141, 17-25, 日本甲冑武具研究保存会, 2003.
- 12) 日並彩乃: 復古大和絵に纏わる「近代性」の言説に関する一考察, *関西大学東西学術研究所紀要*, 49-49, 313-332, 2016.
- 13) 木下龍也: 新刊書評『鞆音遺響』, *美術研究*, 帝国美術院付属美術研究所, 5, 22, 1932-5.
- 14) 考古学会編: 考古界彙報「小堀鞆音氏の甲冑着用式」, *考古界*, 6-6, 338-339, 集成堂, 東京, 1907.
- 15) 棚田暁山: 甲冑着用式, *美之園*, 6-3, 美之園社, 東京, 1930.
- 16) 関保之助: 故実家の立場より見たる歴史画および歴史画家, *塔影*, 12-5, 4, 塔影社, 東京, 1936.
- 17) 明治神宮外苑編: 聖徳記念絵画館オフィシャルガイド: 幕末・明治を一望する, 東京書籍, 東京, 2016.
- 18) 中西正紀: 那珂川町馬頭広重美術館訪問記, *鞆の會々報*, 10, 6-8, 一般財団法人桂石文化振興財団, 八王子, 2023.6.
- 19) 栃木県立美術館: 近代歴史画の父 小堀鞆音展, 栃木県立美術館, 宇都宮, 1982.
- 20) 財団法人芸術研究振興財団/東京芸術大学百年史刊行委員会編: 東京芸術大学百年史 東京美術学校篇, 第3巻, 音楽之友社, 東京, 1997.
- 21) 小堀稜威雄編: 鞆音遺響, 小堀稜威雄発行, 大塚巧藝社制作, 東京, 1931.
- 22) 革丙会 (代表棚田暁山) 編: 弦廼舎畫迹, 巧藝社, 東京, 1933.
- 23) 小山栄達: 武者絵と小堀先生, *塔影*, 12-5, 22, 塔影社, 東京, 1936.
- 24) 安田鞆彦編: 小堀鞆音歴史画素描集, 美術思潮社, 東京, 1943.
- 25) 小堀安雄: 釣りのおもいで, *随筆 釣てんぐ*, 雑魚クラブ編, 南北社, 東京, 1968.
- 26) 迫内祐司: 華巖社 下野の画人たち, 小杉放菴記念日光美術館, 日光, 2022.
- 27) 小堀桂一郎: 旧一高所蔵の歴史画に就て, *東京大学教養学部紀要・比較文化研究/東京大学教養学部比較文学比較文化研究室* 編, 14, 1-34, 1975.
- 28) 日本美術院百年史編集室編: 日本美術院百年史, 日本美術院, 東京, 1989.
- 29) 明治神宮教学研究センター: 小堀鞆音と近代日本画の系譜: 勤皇の画家と「歴史画」の継承者たち: 明治神宮外苑創建80年記念特別展, 明治神宮, 代々木, 2006.
- 30) 末武さとみ: 小堀鞆音の復古大和絵敬慕と近代歴史画創出について, *小堀鞆音没後80年展*, 佐野市民文化振興事業団, 佐野, 2011.
- 31) 横浜市歴史博物館編: 追憶のサムライ —中世武士のイメージとリアル—, *書物学*, 20, 勉誠出版, 東京, 2022.
- 32) 小堀馨子: 追憶のサムライ展示によせて, *鞆の會々報*, 8, 5-8, 桂石文化振興財団, 八王子, 2022-12.
- 33) 棚田暁山: 故鞆音先生蒐集品大掃除之記, *美之園*, 9-7, 86-94, 美之園社, 東京, 1933.
- 34) 末武さとみ: 「ヒーローズ&ヒロインズ」展における小堀鞆音作品の展示記, *鞆の會々報*, 11, 9-10, 桂石文化振興財団, 八王子, 2023.
- 35) 中村好古堂他: 故小堀鞆音翁遺愛品並某家蔵品展観入札目録, 東京, 1934.
- 36) 小堀桂一郎: 毛利元就少年時の巖島神社参拜, *鞆の會々報*, 13, 1-4, 桂石文化振興財団, 八王子, 2024.3.
- 37) 中西正紀: 小堀鞆音没後の九十年史 (その一), *鞆の會々報*, 3, 4-6, 一般財団法人桂石文化振興財団, 八王子, 2021.9.
- 38) 中西正紀: 小堀鞆音没後の九十年史 (その二), *鞆の會々報*, 4, 5-7, 一般財団法人桂石文化振興財団, 八王子, 2021.12.
- 39) 吉井大門: 小堀鞆音筆「勇将義経」, *書物学*, 20, 79-80, 勉誠出版, 東京, 2022.
- 40) 中西正紀: 二階堂美術館と「維盛哀別」図, *鞆の會々報*, 9, 6-8, 桂石文化振興財団, 八王子, 2023.3.
- 41) 小堀桂一郎: 「維盛哀別」圖, *鞆の會々報*, 14, 1-4, 桂石文化振興財団, 八王子, 2024.6.

- 42) 東方書院編：日本画大成, 27, 東方書院, 東京, 1933.
- 43) 飯塚米雨：図版解説, 日本画大成, 27, 32-34, 東方書院, 東京, 1933.
- 44) 小堀馨子：小堀鞆音の画題不詳作品紹介, 蕪の會々報, 13, 8-11, 桂石文化振興財団, 八王子, 2024.3.